

文展の子供の繪と彫刻

倉 橋 生

美術展覽會へ入つて、畫題の統計をとつたりするのは、甚だ心ない、藝術に對して無禮な業であるかも知れません。しかし、そんな大した意味でなく、たゞ一場の茶話として聞いて下さい。また、どうせ素人の茶飲み話ならば、どんな見當違ひの賞め方をしても乃至惡口を言つても、誰れも氣にするような人もありません。

今年の文部省美術展覽會で、子供好きの足を一番長く止めるものは、何と言つても島成園の『祭のよそほひ』でしょう。何しろ其の色彩の見事なことは、畫題を別にして、場中確に第一位に居るものです。白と水色とを重ねた紋幕の前に、粧をこらした、三人の女の子が腰をかけて、その傍に一人の女の子が立つて三人を見て居る。三人の中間二人は姉妹なのでしょう。頬から脛にかけてのふ

くやかさがよく似て居る。三人とも眼のつぶらな、眊の長い、ぼつとした顔立が誠に可愛らしいが、腰をかけて足の充分地につかない膝から下の姿勢が何ともいへずあどけない。そして其の胸高に似めた帯の具合や、キチンと上手に穿かしてある足袋の形に、東京ならば下町といふ、あの大坂の船場あたりのいとはんの心持がよく出て居るような氣がしました。殊に立つて此の三人を眺めて居る子の横顔と髪とに、大坂の女の子の、何となく、せたはしつこい調子がよく出て居ます。此の人の去年の出品の『宗右衛門町の夕』でも、土地の氣分をよく漂つて居る點に皆感心しましたが、此の作でも、實によく大坂の子供といふ氣分が出て居ます。そこに此の作の特色があるのであるまいかと思ひます。「子供」といふものを描かうとしたのでなくて、寧ろ大坂の祭の氣分を子供にあらはして描いた處に。——何しろ、此の生々しい筆と色とで、可愛い、子供の繪を澤山描いて下さるこ

とを、此の將來の多い若い閨秀畫家に是非お頼みし度く思ひます。

菊地契月の『鐵漿蜻蛉』は、いふまでもなく子供を描くために描かれた繪ではありません。『鐵漿蜻蛉』といふ、あの神秘的な趣の多い蟲に調和させて、そのかすうかな、夢見る様な情景を漂はすために、畫家の想像から生み出された子供です。

いはゞ、『鐵漿蜻蛉』の精が抜けて出たといつた様なものです。此の繪は作品として非常に優れたものだとおふことです。私も此の作の前に立つて、一歩づゝ後ずさりながらあの廣い場面に見入つた時に、例の水の上をすうと來てすうと渡る『鐵漿蜻蛉』の氣分が、どこをつかまへるともなくつかまへられるのに敬服しました。しかし、私は現實としてはあんな子供は嫌いです。ボンやりとして、始終畫夢を見て居るような子供は、あれは寧ろ『鐵漿蜻蛉の童子』といつたものですわねえ。

西櫻洲の『祈禱』に子供が出て居ますが、支那

の一風俗を描いたもので、子供は偶然のつきものに過ぎないのでから論もありません。

栗林王葉の『さすらひ』は、年のころ十一、二、可憐なる女の子が、一棹の破れ三味線を糧とも慰めとも、町から町へ、村から村へさすらひの秋の夕暮を、古堂の石敷へ憩ふて居る、あはれに悲しい子供の繪です。いとしや此の小娘に、こんな可愛そうな目をさせる母親は、容色ばかりは人並すぐれて美しかつたと見えます。細おもての、口の小さい、もみあげの長い、頸足のとをつた、さびしい程に美しい顔が、貧と疲れにやつれ切つて居ます。素足の冷飯草履をはいて、冷たい石に腰をかけて、うつとりと首をかたげた撫で肩をかすめて、あゝ何處までも冷たい世や、銀杏の枯葉がはらりと散りかゝる。私は見て居るのも胸が苦しくなりました。

松村梅叟の『白粉の花』は、ぼつとして、あどけない、少女の一面をあらはそうとした思ひつき

には充分の首肯が出来ます。しかし姉の方の白粉の花式なのに比して、妹の方の顔が、どうして此の畫面に調和して居ません。私は此の顔を見て、すぐに腺狀殖生アトインジブローシスのある子と診断しました。少くも呼吸が苦しそうな鼻です。白粉の花と、此子の鼻とが、どうも調和しないと下手な洒落でも言ひ度くなります。

陳列の順序は後に歸りますが、樸文峯の『唐もろこし』と矢澤弦月の『熟果』は、私の豫て有して居る一つの期待に合つた小兒畫でした。私はふだん斯ういふことを考へて居ます。子供の繪は、あらゆる境遇、あらゆる種類の子供を描いて貰い度いが、其の中に田舎の子供も是非描いて欲しい。美しい衣装粉黛も結構であるが、それのない赤裸々な田舎の子供に、繪になる美しさを見出して呉れる人はあるまいか。斯んなことを、いつも思つて居るのです。『唐もろこし』と『熟果』とは即ち此の私の希望と同一方向にある繪です。『唐もろこ

し』の方は多少畫家の心から詩化されて居ますが。『熟果』の方は田舎子供のありのまゝが、熟果といふ極めて好適なる氣分を背景として、よく描かれて居ます。たゞ此の作が、もう一ときり大膽なシンブリシチーを發揮して居たら尙よかろうにと思ひます。

西洋畫の方に移つて第一に南薰造の『搖籃』に來た時、少しく散漫になりかけて居た私の注意が、その小さい子供の寢顔に吸ひ込まれて、丁度寢入つた子供の傍に居る時のように呼吸をこらして、そこで立止まりました。質素な、しかも却つて趣味の多い簡單な搖籃の中で、毛布にくるまれて、暖かそうにすやくと寢入つて居る子供の顔、殊にその口もとの可愛らしさが、私はたゞもう黙つて見入るばかりでした。私は常から南氏の作風を好んで居る一人なのでして、その穏和な、明るくて暖かみのある、堅くるしくない堅實さのある處は氏の作のいづれにも通じて私をよめるこぼす處なの

でした。今年の此の展覧會に出て居る『春さき』も、實にその好特色を充分にあらはして居るものだと思います。此の特色は子供を描くに、類のない適當な人と言つてよいものでしょう。

相田直彦の『少女』は背景の一部に月琴を使つた處が先づ私の興を殺ぎました。それに少女の咽が太過ぎます。

石井柏亭の『N氏と其一家』はお父さんに、お母さんに、姉妹三人の平和なる家庭を描いたもので、見るからに羨しい程愉快な光景です。

矢崎千代二の『草刈』は、子供が主題になつて居る作ではありません。夏山の草刈の午後、父親は鎌を砥石にかけて居る傍に、母親は赤坊を草の上に寝かして乳をやつて居る。姉娘は茶をわかして居る。こんもりとした後の森を通して夏の日が強く晴れて居る。刈り取つて束にした百合花が、あたりに芳香を放つて居る。いはゞミレーの作風を思はせるやうな作で、素樸な趣味がよく出て居

ます。たゞいろいろのものが聊か描き過ぎてある故か、全體が複雑過ぎた感がして、素樸の味を少々損ふ様の氣がします。前に『熟果』に對して言つたと同じように、一層大膽なるシンプリシチーを希望したかつたのです。

森田三郎の『海の子』、北島淺一の『濁江の夕』、大野隆徳の『池畔の夕涼』、之等にも子供が出るが、深い注意をも引きませんでした。赤松麟作の『鶏と子供』は忠實に子供が描いてはありますが、甚だ靜的で、子供の動的な處が出て居ません。鶏を抱くといふ様な、繪には六かしい處を描いた爲かも知れませんが、そこに物足りなさがありました。

彫刻の中でフェオドラ・グラチンの『デボンシエーアの少女』は餘り小さいのと、それに私に最もよく分らない鑄銅である爲とで、強い興味をひくことが出来ませんでした。白井保次郎の『面』は面白いながら、あゝいふ形は私には谷はない趣味で

した。子供の骨格は可なりよく出て居るとは敬服
しましたが、頭が何だか物足りません。

* * *

斯う見て来て、私は何時の展覧會にも感ずる一
つの感じを此の展覧會でも感じました。但し之れ
は美術展覧會なるものに對する當然の正當の感じ
であるかどうかは私は知りません。たゞ私として
の感じなのです。といふのは何かといひますと、
我國に偉大なる小兒畫家の何故出ないだらうとい
ふことです。少くも小兒の忠實なる研究者が畫家
の中に少ないことです。ラルソンやリヒターの様
な特別な人は假りに別としても、レイノルド、ウ
ーデー、などの様な、小兒畫としての一規軸を出
して呉れる人はないものでしょうか。

美術展覧會へ入つて、随分思ひ切つて非藝術的
の見方と、勝手な言ひ分とをしました。が、子供
と私とに免じて誰れも笑つて許して下さいさるでし
うと思つて居ます。